

2012年3月31日

# 大学入試は高校現場に何をもたらしているか

福井県立足羽高等学校教諭 谷口典雄

## 1 自己紹介を兼ねて

1957年生

1976年3月 高校卒業 →4月 大学(工学部)入学

1979年3月 工学部中退 →4月 教育学部入学(このとき初年度の共通一次試験を受験)

1984年3月 教育学部卒業 →4月 福井県立高校教諭となる

1984年～(2年) 福井県立大野高等学校(全日制)勤務

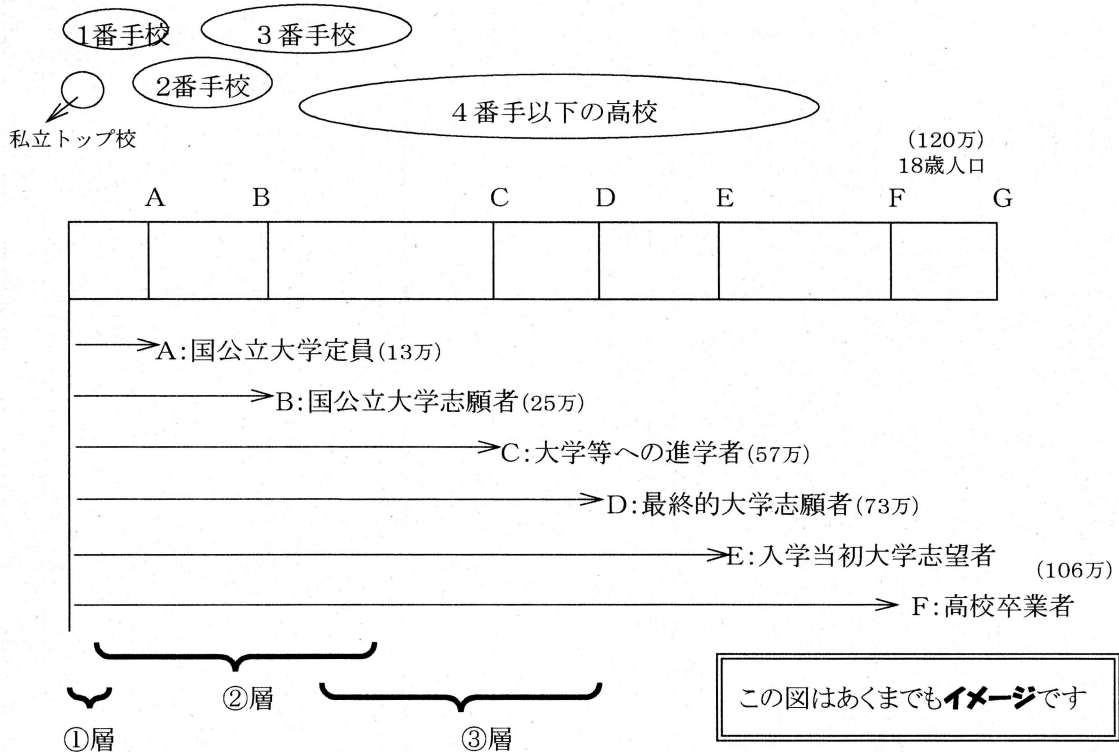
1986年～(2年) 福井県立大野高等学校(定時制)勤務

1988年～(5年) 福井県立福井商業高等学校 勤務

1993年～(13年) 福井県立藤島高等学校 勤務

2006年～(6年) 福井県立足羽高等学校 勤務(明日から7年目)

図1



①層＝東大・京大(私立では慶応・早稲田の文系)を狙うような超トップ層の生徒……①層

②層＝難関・中堅国立大から地方国立大あたりまで(私立では難関・中堅私立大)を狙う層の生徒

③層＝地方国立大や難関・中堅私立に手の届かない生徒

……『センター試験 その学力に未来はあるか』p76より

センター試験 その学力に未来はあるか

2011年1月31日 発行

[編者] 谷口典雄・山口和孝

[発行所] 群青社

[発売] 星雲社

2何が問題か(誰が何で困っているか)

発端：県でトップの進学校で教えていて、生徒の学力を伸ばせている実感がない！

(入学時のままなら取れなかった点数を、センター試験で取るようにはなっているのだが…)

→いわゆる「学力低下」という問題

3はじめに述べておきたい2つのこと

(1) 問題は複雑であり、簡単な解決法は無い！

→「センター試験を無くせば問題は解決する」などとは言わない。

(2) 本当の議論が求められている

国会の議論で、「あ、そうか。あんたの方が正しい！」というように、議員が考えを改める場面を見たことがない。みんな考えを変えない。あれは議論ではない。

4私が高校の現場で感じる「学力低下」

<学力低下の3つの側面> (『センター試験 その学力に未来はあるか』p51～)

(1) 言語力の低下

漢字が読めない。書けない。漢字の意味を理解していないので適切に使えない。

語彙不足。思考力の低下。

教科書を読んで自分で理解していくことが苦手。

黒板は写せるが、ノートはとれない。(授業には、親切すぎる板書やプリントが溢れている。)

言語による表現力も低下。主語不明、繋がりや切れ目が曖昧で読みにくい文章。

知識を断片的に単語で答えることはできても、“知の物語”を語ることはできない。

(2) 知の量的不足と質的低下 (“知の物語性”の欠如)

知識 (学校知・生活知) の不足。(「学力=知識」ではないというものの…)

共通教養の崩壊。→高校の授業効率の低下。

かつて文科省は、「教える知識の量を減らして考える力を育てよう」と主張してきた。

しかし、知識の量が乏しい子どもたちには、結果として考える力も育っていない。

なぜなら、知識は、考えるための足場だからである。

「奈良時代→平安時代→鎌倉時代→室町時代→戦国時代→安土桃山時代→江戸時代」といったような、日本史の流れがマップとして頭に入っていない生徒に、「平安末期の動乱期に若き日々を過ごし

た鴨長明は、鎌倉に幕府が開かれた後、若い頃の見聞をもとに、無常観に貫かれた名著『方丈記』を著した」というような知識をインプットしようとする、生徒は一時的な虚しい丸暗記に走り、しばらくすると情報の半分以上を忘れてしまう。下手をすると、『方丈記』と『源氏物語』の時代順すら答えられないというようなことが実際に起こる。



新たな知識や情報をインプットするには、既知の情報を足場としたマップの上に置いていかなければならないのだが、基礎知識が少なすぎてマップ自体が存在しない場合、新たな知識は座標のない空間に浮遊し、定着する前に雲散霧消する。

知識の量が不足していると、知識と知識の間の距離が遠くなる。Aという知識とCという知識は、その間をつなぐBという知識が抜けていると、リンクしなくなってしまい、結果として知識がバラバラのままになり、知識を体系として総合する思考も生まれにくい。



知の「量の不足」が、知の「質の低下」を招いている

「シンデレラがお城に落としてきた物は何ですか」と聞かれて「ガラスの靴」と答えられるのは、「シンデレラ」という物語を通して身についた知識であって、「シンデレラが忘れてきたのはガラスの靴だ。これは試験に出るから……」と覚えて覚えたものではない。



どんな「知」にも「物語」がある。「物語」とは、すなわち、「因果律」である。  
「因果律」を、もう少し易しく「つながり」と言い換えてもよい。



本来「知」というものは、体系的な認識や思想や価値あるメッセージ(=これを“知の物語性”と呼ぶ)の中に位置付いているものである。“知の物語”を学ぶことで、様々な知識が有機的につながり、本当に自分のものになる。

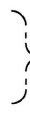


「物語」に向き合えない子どもたちは、断片的・単語的な知識に飛びつき易い。

「言語力の低下」

「知の量的不足と質的低下」

「知に向かう姿勢の劣化」(次項)



=どれも子どもたちが「知の物語」へ接近するのを阻む要因

### (3) 知に向かう姿勢の劣化

その時点で自分の興味が湧かないものには、最初から背を向ける生徒が増えた。

知には広い裾野が必要だという考えや、自分の知の裾野を広げようという姿勢の欠如。

「考えること」が、現実と切り離された、その場限りのゲームでしかなくなっている。

小論文で環境問題の解決法を問われると、「一人一人の生活を見直す」、「ゴミを分別して棄てるようにする」といったお行儀のよい解答を、安易に書いてくる。その簡単なことがどうして広く普及しないのか、どうしたら普及するのかという本質的な問いに向き合う手前で(課題として小論文を提出した時点で)彼らの思考は停止してしまう。自分自身が環境破壊的な生活をしていようが、ゴミの分別を実行していなかろうが、平気。

↓

何を学んでも、何を問われても、その内容が自分にとってリアリティをもたない。  
 これでは、科学や学問と呼ばれる世界に入っていけない。

↓

「知」が学校で習ったことで終わっており、自分の知を自分で自主的に拡大する営みには向かっていない。

↓

「学ぶ力」が育っていない。

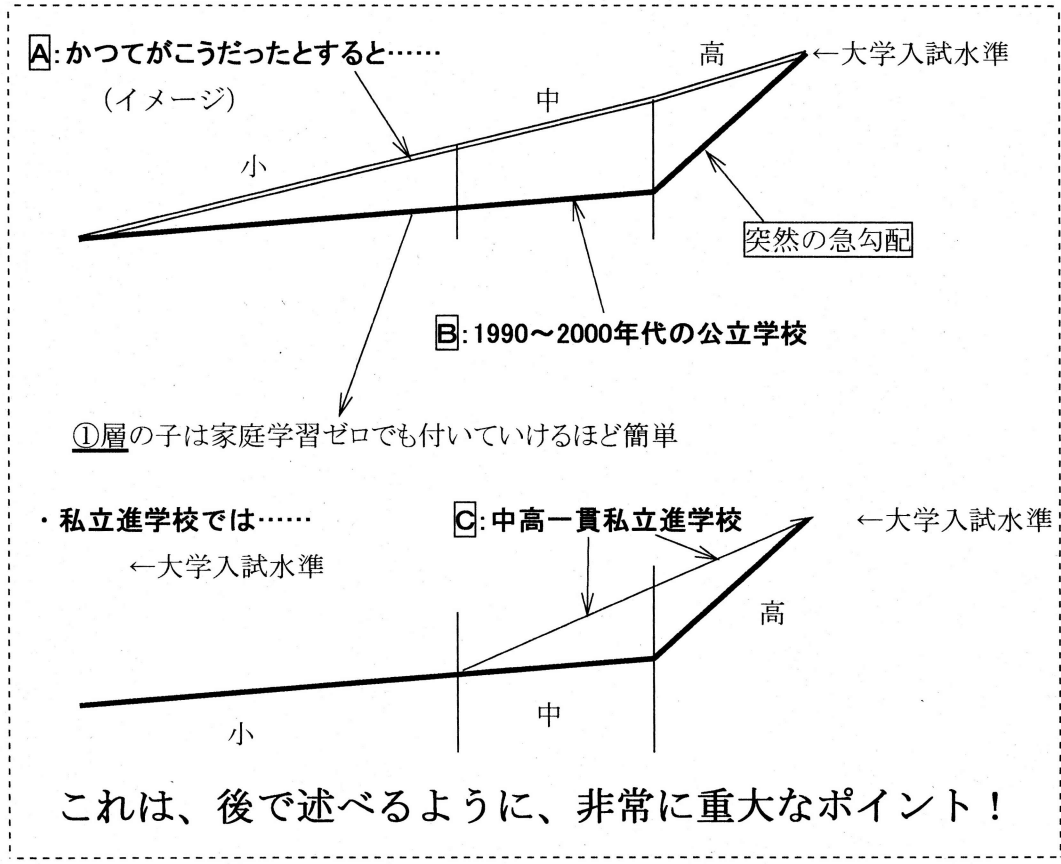
**4** こうした「学力低下」の背景に何があるか

**問題は複雑である**

「小→中→高→大」を通して、あるいは社会全体で何が起きているかを見なければならない。

**(1) 小・中学校での学習内容の削減の影響は軽視できない**

- ・1980年、1992年、2002年と、学習指導要領改訂のたびに学習内容がさらに極端に削減された。
- この間の文部省・文部科学省の迷走は、日本の教育現場に大きな禍根を残したと思う。



・ある「中学校地理教科書」

「世界地図の見方」を除くと、世界の地理で、きちんと学習するのは、ヨーロッパ、中国・マレーシア、アメリカのみ。→マップができない。



・ある「中学校歴史教科書」

	日本史部分	世界史部分
19世紀まで	130ページ	10ページ
20世紀以降	45ページ	15ページ

世界史合計 25ページ

(高校世界史教科書は 284ページ)

彼らに高校レベルの世界史や地理を教えようとしたとき、  
生徒の頭の中には、それまでの段階で身につけているべき「知の足場」「マップ」が無かった!

## (2) 入試の「教育力」の光と影

### <入試には教育的機能がある!>

- ・受験生は必ず合格のための対策を立てて臨む。
- ・受験生を教えている高校の教師も、必ず合格のための対策を立てて教える。

↓

- ・そのようにして合格するための学習に取り組んだ結果、大学が望むような学力が身につく。

### <入試の教育的機能がマイナスに転化する場合がある!>

- ・対策を立てて取り組んでも、学力向上に結びつかないような入試。
- ・対策を立てて取り組めば取り組むほど、かえって学力の回復が妨げられるような入試。

### ウォッシュバック効果

評価の形式を先に宣言する事で、受講者は評価の形式に対応した学習をする。

宣言する内容で、何を学ばせたいかをコントロールできる。

例：スピーチが上達する講義を受けて……

A: 受講前に、教育者が『最後に受講者のスピーチの内容を評価の対象とする』と宣言した場合、  
→ 受講者は、“実際のスピーチ”を想定して学習する。

B: 受講前に、教育者が『最後に講義の要点を○×テストで評価の対象とする』と宣言した場合、  
→ 受講者は、“記憶”を重点に置いて学習する。

出典：[http://isseisato.blogspot.jp/2010/07/blog-post\\_08.html](http://isseisato.blogspot.jp/2010/07/blog-post_08.html)

## 5 センター試験は高校生の学習にどう作用するか

### a センター試験は「論理を立てる力」・「言葉でアウトプットする力」をスポイルする

- ・「解答を作る力」を身に付けるのを目標とするのと、「選択肢から選ぶ力」を目標とするのでは、学習の質が大きく異なってくる。
- ・センター試験の影響下では、「思考を言葉でアウトプットすること」「解答を自分で構成すること」が、限りなくおろそかにされる。
- ・受験生たちは、正解を選択肢の中から選ぶような○×式トレーニングはするけれど、創造的思考力・論

理構成力・言語構成力を鍛えるという最も重要な学習から逃げてしまう。

### b センター試験は「物語」を敬遠する生徒を養成する

- ・短期間に効率的に点数を上げようとして、生徒は知識注入暗記型の「学習」に走る。
- ・背景には、「急勾配」と「科目の多さ」と「目標得点とのギャップ」がある。
- ・そういう生徒は、知識と知識の間をつないでいく「物語」を語ろうとする教師に対して、「もっと効率の良い授業にしてください」と要求する。
- ・「選択形式の問題演習で養成された一時的知識は、簡単に剥離するんだよ」という良心的なアドバイスも、「とにかく3年生の1月までの限られた時間内に、これだけの知識を詰め込まなければいけない」というプレッシャーに潰されそうになっている生徒には届かない。
- ・知識注入暗記型の「学習」に陥っている生徒は、無意識のうちに、「勉強とは、面白くないことを我慢して覚えること」という観念に毒され、学で花開くべき「知の蕾」を摘んでしまう。

覚えなければならない事項の多い科目の代表格は「日本史」「世界史」であるが、「日本史」「世界史」にかけられる時間数が限られていて、時間的効率が重視される。そして、残念ながら、現在のセンター試験「日本史」「世界史」に対応するには、用語集暗記・大量問題演習の方が、多くの生徒にとっては時間的効率がいいのだと、大多数の地歴科の教師が口にする。好んで用語集暗記・大量問題演習をさせ教師などいないのだから、もしも、もっとよい方法があるのなら、とくにその方法が普及しているはずだともいう。「叙述形式で答えなければならない問題に対応しようとすれば、教え方も大きく変わるだろう」ともいう。

### c センター試験は「学習」を「トレーニング」にすり替える

- ・センター試験が始まってから、この試験の得点力を伸ばす学習方法(指導方法)を、大勢の教師たちが考えてきたが、決定的な秘策もないまま、何年も過ぎていった。
- ・しかし、ついに、ある秘策が登場すると、それは急速に全国の進学校現場に広がっていった。それは、過去問や模擬問題を使った大量の問題演習である。
- ・十数年前、ある予備校でセンター試験の2か月前から問題演習を繰り返した結果、他に特に何もしなくても、明らかに得点力が1~2割アップしたというデータが示され、これが「普遍的で有効な対策」だという神話が全国的に広まった。
- ・この「神話」には根拠もあった。どんな分野にも、現場で経験を積んでしか学べないことがある。「こういう選択肢問題では、こういうことに着目せよ」というようなことをどれだけ多く教えても、必ず教え漏れがあるし、仮に漏れなく教えたとしても、それが本当に身につくためには、実際に問題を解く経験の中で身体で覚えるのが一番だという考え方である。
- ・何よりも、実際、他に何もしなくても、演習を繰り返すだけでセンター試験の得点力が上がることが、多くの高校現場で確かめられた。
- ・以来、多くの進学校では、3年生2学期後半に、この問題演習の時間を確保するために、3年生の授業を半年で切り上げる努力がなされるようになった。これだけでも、高校生の学習に与えた影響は想像以上に大きい。
- ・それだけでは済まされず、大量の問題演習が得点力をアップさせるというなら、もっと早くからセンター試験的な問題に触れさせておけば効果があるのではないかと考える人たちが出てくるのは、必然であった。かくして、高校一年生用の問題集にも、センター試験もどきの選択肢問題を取り入れたものが大量に

出回るようになった。模擬試験にも、早いうちから選択肢問題が入り込んできた。こうして、高校1年生の段階からセンター試験もどきの選択肢問題を使って演習するという「学習指導」が普及し、学習全体の中で占める割合が増えることで、高校生の学習は明らかに変質した。

・ただし、「問題演習」という学習方法自体が問題なのではない。学んだことを本当に自分のものとするには、「問題演習」は有効な方法である。それが、センター試験もどきの選択肢問題やマークシート式の問題が解けるようになることを目指した演習だという点が問題なのである。(ウォッシュバック効果)

## 「穴埋めプリント」による「学習」を追放しよう！

(1) 中井<sup>ひとし</sup> 仁 (大阪府立茨木工科高校・物理教諭(2008年当時)) の論

～大学教育出版「検証「共通一次・センター試験」より～

### 授業プリント例 A (理科総合 B)

地層には、それが堆積した地質時代に生息した生物の化石が含まれる。従って、特定の化石が見つければ、地層が形成された地質時代がわかる。このように地質時代を示す特徴的な化石を(① )という。

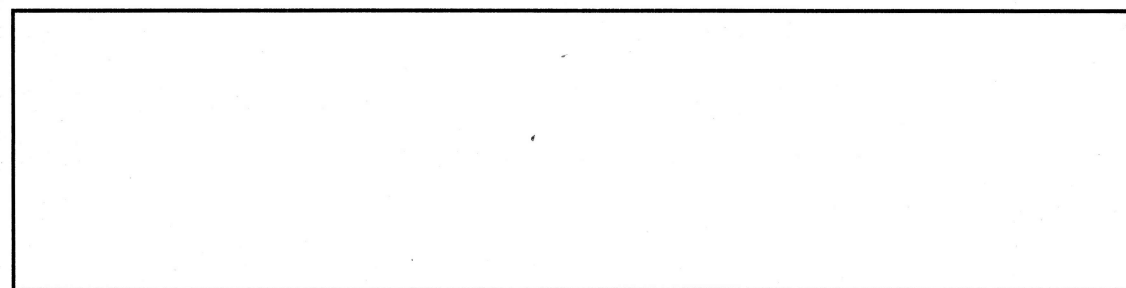
また、遠く離れた地層でも、同じ(①)が見つければ、同じ時代に堆積した地層であることがわかる。これを(② )の法則という。

#### 【示準化石の条件】

- (③ ) が広い。
- (④ ) が短い
- (⑤ ) の速度が大きい。
- (⑥ ) が多い。

答え：①示準化石 ②地層同定 ③分布領域 ④生存期間 ⑤形態変化 ⑥個体数・発見の頻度

### 授業プリント例 B (理科総合 B)



#### 【示準化石の条件】

- a ( )。
- b ( )。
- c ( )。
- d ( )。

谷口が一部変更

## A と B とノート学習 (C) の比較

A (穴埋めプリント学習)	B (記述式プリント学習)	C (ノート学習)
生徒は「示準化石」「地層同定」という語句を入れるだけ。	生徒は、教師の口頭説明、または板書による説明を書き写さないといけない。	<u>書き写すのはもちろん、書き写すスペースの配分から自分で考えなければならない。</u>
習った語句をただ覚えるだけで、それを使って表現する練習ができない。	生徒は少なくとも一度は、「示準化石」という語句を用いた文を書く。	
<u>思考過程を飛ばして</u> 、すぐに答えを知りたがる生徒の傾向を助長。(括弧を埋めるべき唯一の答えを設定し、そこに素早く到達することを要求することになる。)	より教育的。適切な文脈の中で理解されなければ、語句は実際に使える語彙とはならないから、たとえ引き写しでも一度はそういうことをしておく方がよい。	
生徒の活動度が低い。	中間	生徒の活動度が高い。
ほとんどの生徒が同じように指示した語句を括弧内に書き入れられる。(皆ができる)	指定した枠内に上手に書くことができる生徒、出来ない生徒がいるが、その差はノート学習よりは小さい。	生徒によって大きな開きが生じる。
授業開始後に配付すれば、全員が課題に取り組める。		ノートを忘れてきて、手持ちぶさたにしている生徒が出てくる。
授業の能率化に役立つ。		
さっと目を走らせるだけで点検が済む。	AとCの中間	点検すべき箇所を開くのも手間。次の時間までの保管場所にも苦労する。整理して書けない生徒もいるから、点検自体が大変。

### (2) <sup>ひとし</sup>中井 仁 の実践

- ① 生徒が語句だけでなく、その重要な語句を含む文章を書く機会を与えるように気をつける。
- ② 単に黒板に書かれた内容を書き写すだけでなく、自分で文章を組み立てて書く機会をつくる。

あるテーマについて口頭での説明を行った上で、これを自分の文章でまとめさせる。

(テーマを与えて「書きなさい」と指示しただけで書ける生徒が減少したから。)

#### 事例 1

##### <テーマの設定>

問 真屋の屋下がり砂浜を素足で歩くと足の裏をやけどしそうになる。海水は冷たいのになぜ砂浜は熱くなるのか。ただし、乾いた砂の比熱は0.19(J/gK)である。

##### <口頭での説明> (以下は谷口の想像)

T「A君、なぜだと思う」

S「砂浜は表面の砂に日光が当たり続けるが、海の水はかき回されて混ざるから」

T「なるほど、そうか。それもあるな。でも、それだけなら、なぜ砂の比熱が出ているのかな？」

S「砂は海水よりも暖まりやすい。」

T「それは砂の比熱が海水よりも大きいってということ？ 小さいってということ？」

S「小さい」

T「そうだね。比熱が小さい物ほど暖まりやすい。もう答えは書けるかな？」

#### <生徒の解答文章>

砂浜(乾いた砂)は比熱が小さく、温度が上がりやすいのと、表面ばかり日光が当たるので、熱くなってしまふ。海水は比熱が大きいので、温度が上がりにくいのと、波で混じり合い、海水全体を温めることになるので、砂浜と比べて冷たい。(生徒解答)

#### <教師の助言>

2つの理由を並べて書くときの表現を工夫しよう。例えば、「……、温度が上がりやすい。また、表面ばかりに日光が……」とすると良い。

このようなやりとりは、穴埋め式プリントを使っている場合は、まず起こらない。

## 事例 2

#### <テーマの設定>

問 晴れた日の午前は海から陸に向かって風が吹き、夕方になると陸から海に向かって風が吹くのはなぜか。「比熱」、「上昇気流」を使って説明せよ。

#### <口頭での説明> (略)

#### <生徒の解答文章>

朝は陸の方が比熱が小さく、海の方が高いので、陸の方で上昇気流、海で下降気流が発生するので陸に向かって風が吹く。夕方は海の方が比熱が小さくなるため、海に上昇気流が発生するため海に向かって風が吹く。

この生徒が「比熱」を正しく理解していないことが分かる。比熱を使って熱量を計算する問題だけをやっていただけでは、教師は生徒のこのような躓きに気づきにくい。

### (3) 国語の授業における実践の提起

- ① 文・文章を、黒板に書いて写させる。
- ② 口頭で述べた文・文章を書き取らせる。
- ③ あるテーマについて口頭での説明を行った上で、これを自分の文・文章でまとめさせる。
  - a 幾つかのキーワードを挙げ、「この言葉を使って…」
  - b キーワードはとくに挙げずに、「～について説明せよ。」
- ④ 口頭説明抜きで、あるテーマについて文・文章で説明させる。

#### 比熱とは(ネット上の解説)

比熱とは1(g)の物質の温度を1(K)だけ上昇させるのに必要な熱量のことをいい、単位は(J/gK) 等で表します。つまり、比熱が大きいということは、温度上昇に必要な熱量が大きいということになり、比熱が大きい物質ほど温まりにくく冷めにくいということになります。

③の授業例：教材＝夏目漱石「こころ」

### <テーマの設定>

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ちで彼を倒すことができるだろうという点にばかり目を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向かって急に厳粛な改まった態度を示しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だの感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のない者はばかだ。」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。私は彼の使ったとおりを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味を持っていたということを自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行く手をふさごうとしたのです。

問 私が投げ返した言葉が「復讐以上に残酷な意味を持っていた」とは、どういうことか。

### <口頭での説明> (あるいは板書による)

- ・「明治書院」の指導資料  
その言辭がKの「恋の行く手をふさぐ」策略から発せられたという点で「残酷」
- ・言辭の残酷さの程度を測るものさしは？  
言辭の目的？ 相手に対するダメージ？
- ・私の言葉は、Kを「変に悲痛」にさせた  
Kに同じ言葉を言われたとき、私は…… (比較)

### <上記の口頭説明(あるいは問答)のあと、生徒に文章を書かせる>

**板書は文章になっていなくても、ノートには文章を書かせる！**

このような授業(指導)は、センター試験をゴールとして設定しているかぎり、出てこない。

## 6 AO推薦入試、少科目入試の影響

佐々木隆生先生の著書を読んで

「普通教育の完成」の放棄

- 高校の多様化、カリキュラムの弾力化、画一性の排除、
- 「アラカルト方式のセンター試験」、入試の多様化、評価尺度の多元化、
- 少数科目入試の奨励、AO推薦入試、(総合判定主義の放棄)

という流れが、とてもよく分かった。

(1) 指導が多岐にわたることで学校の教育力が低下する(しわ寄せは生徒に)

(2) 推薦AO入試、少科目入試は高校生の学力をスポイルする

- ① 教科学習の不足、狭さが高校生の知を狭める
- ② 教師主導の受験準備が生徒の主体性・自主性を眠らせる
  - ・AO推薦入試、少科目入試を選ぶ生徒の多くは、苦しいことから逃げた生徒。
  - ・進学したあと、果たして、主体的・自主的・積極的に学問と向かい合えるのか？

むかしはなぜ、少数科目（3科目）でも伸びたのか？

- ・高校のカリキュラムが「弾力的」でなかった。（＝全科目を広く学ばせた）
- ・カリキュラムの弾力化以上に、学習は弾力化する。「内職させてください」

## 7 「学力低下」に一石を投じるためには？

(1) 「学力を測れるかどうか」よりも「教育的機能において優れているかどうか」

- ・教育的機能において優れていれば、母集団全体が高い方に移動。
- ・「高校教育の達成度評価」か「大学による選抜」かは、高校生の学力形成において重要な問題ではない。
- ・高校生の学力形成において重要なのは、大学入試を突破するために最も重要度の高いテストでどういう問題が出され、その対策としてどういう学習が効果的である(ように見える)かということである。

(2) センター試験がなくなったら受験生の学力は上がるのか？

- ・物事は単純ではない。
- ・受験生の学力を上げるのは簡単ではない。
- ・学力を上げるノウハウは確立していない。
- ・「5（6）教科7科目」自体は問題ではない。  
受験生にとって負担増＝それだけなら今日ほど重大な問題ではない。
- ・「負担増」×「センター試験」＝問題は複合的に起こっている。

(3) 面白いと思わないと学力は付かない。

- ・センター試験演習は面白いか？ NO！
- ・面白ければ学習は超過達成される。（そうしないと学力は上がらない。）
- ・学習を面白くなくしているのは何か？  
受験勉強？  
センター試験？  
「なぜ古典を学ぶのか？」にうまく答えられない教員の増加。  
（わからせることはできなくても、うまく答えることはできる！？）

## 8 誰が研究に関わるべきか？

「学力層によって起こっている現象は異なる」という話（「現場」というものについて）

- ・「④層の生徒がほとんど」という高校では センター試験の影響 < 私立推薦対策
- ・④層の生徒には 十数年前なら、受験に囚われない「面白い授業」ができたのに、  
→今は、単純労働的ドリルでないと、生徒が受け付けない。
- ・大学の先生は「下半分の子どもに起こっていること」を知らない。
- ・入ってくる生徒の層が違くと、大学の先生同士でも、話は噛み合わない。